

子どもを孤独にさせない方法

子どもが示す心理的な問題にはさまざまな意味があります。

その一つが「入場券としての問題」で、映画の入場券をいくら眺めても映画の内容がわからないように、子どもの問題をいくら見てもその内実はわからないのです。例えば、テストの前だけ「みんなが私を無視する」と訴える女の子がいました。テストが終われば訴えは消えて、また友達と仲良く遊んでいます。おそらく、テストの緊張感が本人の不安を高めて、「無視されているかも…」という不安と結びついたのでしょう。このように、心理的な問題には見た目ではわからない「意味」が隠されているものです。大切なのは、この「意味」を探って、そこに正しくアプローチしていくことです。

他にも「迷惑事としての問題」があり、これは子どもが示す問題は多少なりとも迷惑事になるということです。周りの人が「迷惑だ」と感じられないと、そこに注目してもらえらることも、適切にアプローチしてもらえらる可能性も減ってしまいます。だからこそ、親が「それはしないでくれ…」ということをして率先して行ってくるのです。教員の子どもの不登校が多いのも、警察官の子どもの非行が多いのもそういう事情があるのです。

こういうさまざまな意味を持つ「子どもの心理的問題」ですが、周囲の大人の心構えとして大切なのが「問題を恐れない」ということです。子どもの心理的問題は、「ここに問題があるよ」「ここが何とかするところだよ」というメッセージです。このメッセージに即座に反応し、時には専門家の助けを借りながら、適切にアプローチしていくことでかなりの割合で問題は改善していきます。逆に問題に気づき、関わることができないと、子どもが一人で問題を抱え、孤立させ、苦しめることになりかねません。ですから、大人は「子どもには問題があってもいい」「その問題に気付いて対応することが大事なんだ」と考えておくことが大切になります。

気をつけねばならないのが、周囲の大人が無自覚のうちに向けている子どもへのイメージです。「あなたは元気で明るい子だよ」「何の問題もないよね」「学校はいつも楽しいよね」などのように大人が思いたいのは無理からぬことです。しかし、こうしたイメージを子どもに向けることで、子どもは自分の内側にある「問題」やその「種」について表現することが難しくなってしまいます。子ども自身が「僕は元気で明るいんだ」「問題はないんだ」「学校は楽しい」と思い込み、その思い込みに反する気持ちを抑え込んでしまうのです。

子どもには「元気」「明るい」「楽しい」とは逆に位置するようなさまざまな思いも抱えているのが普通であり、そして、「それでいいのだ」と考えておきましょう。表現された子どもの「問題」や「負の感情」に恐れず向き合い、関わろうとする意志を見せることが子どもを孤独にしないために大人ができることなんです。